

## 河川環境の整備・保全に関する政策レビュー委員会

## 第二回合同委員会 欠席の委員の意見

## 岸委員

## 1. 資料 - 5 「生物の生息・生育・繁殖環境の整備と保全」

## (1) 多様な生物の生息・生育・繁殖という視点の徹底について

- ・繁殖という視点から対応をすすめるという方向が必要。「多自然川づくり」の指針によってこの点が明確になったので、今後は、繁殖環境の把握・保全・創出が大きな課題になるというまとめがどこかで明示されてよいのではないか。

## (2) 多摩川での取組みについて

- ・多摩川での取組みでは、ハリエンジュを対象に実施しているが、最近では、区間も含めアレチウリ等の問題が深刻化していることを理解してほしい。

## (3) 流域における各施策の実施状況からみた評価

- ・国際的な視点で見ると、日本は流域的な視点の取り組みを試みようとしている点は評価できる。

## (4) 河川水辺の国勢調査についての課題

- ・河川水辺の国勢調査は、今後河川の後背地を取込んだ調査とする必要がある。

## 2. 資料 - 5 「魅力ある水辺空間の整備・保全」

## (1) 市民活動及び学校による川での活動・学習の推進について

- ・土手以外の河川空間の植生及び安全等の日常管理に、河川管理の予算がつかないという現状が懸案となっている。自然の拠点、学習拠点と位置づけられるような場所として、「安全で魅力的で安心できるサポートのある水辺の拠点（河川敷など）」を確保し、市民や学校に提供し続けることを河川管理者の本務の一部であると河川整備計画等において位置づけ、一般予算化する必要がある。

## (2) 河川の空間利用について

- ・河川の自然環境の保全のためには、継続的で適切な維持管理が必要という観点が課題としてあげられることが必要。具体的には、土手の法面管理は予算化されても、高水敷、水際の植生、自然の管理については、日常的で継続的な管理費はつけないでよいということが固定化してしまった状況が課題である。

## 3. 資料 - 5 「地域・市民との連携・協働」

## (1) 河川利用の促進について

- ・活動の促進のためには、子どもや学校、地域活動団体の側からの理解が必要。学校の立場から見ると、川を学習や野外体験活動の場として利用したいという需要は大きいですが、「安全で魅力的で安心できるサポートのある水辺の拠点」が少ないことがあげられる。その需要に答

える場所・機会・サポートを河川管理者が提供することが必要。そのためには、河川管理者による拠点づくり、拠点の自然環境の継続的な維持管理、河川管理者との協働・受託によって推進するNPO等との組織の活用が必要である。

#### 4. 河川環境行政の今後の方向について 報告書骨子素案

##### (1) 「生物多様性河川戦略」の名称について

- ・「生物多様性河川戦略」の名称については、国土交通省の今まで取り組んできたオリジナリティを活かした、「多自然水系戦略」が流域的な視点も含まれよいと思う。

##### (2) 河川の持つ個性について

- ・河川の持つ個性については、鶴見川のような小さい河川は、洪水対策とセットで新たな環境を創出することも必要となるため、多摩川のような巨大な河川の他に小河川について言及すべきである。

## 中村委員

---

### 1. 資料 - 5 「生物の生息・生育・繁殖環境の整備と保全」

#### (1) 総合的な評価について

- ・魚類の遡上環境など水域の改善については若干進んでいる様だが、陸域の多様な環境や止水域については、まだまだこれからという印象を受ける。
- ・各施策でもともと目標としていたことに対する効果と、想定していなかったが副次的に生じた効果とはわけて評価すべきである。
- ・多自然川づくりや樹林帯制度のように、もともと治水目的で事業を実施するなかで環境にも配慮してきたものは、水系全体の環境を良くするという視点で評価する必要はないのではないか。
- ・多くの河川では在来種のカワラノギク等から外来種のシナダレスズメガヤ等へ移る過程がみられ、2極化していると考える。

### 2. 資料 - 5 「魅力ある水辺空間の整備・保全」

#### (1) 河川の空間利用について

- ・環境管理計画では、保全という観点での評価はあまり行われていないのではないか。
- ・空間利用計画では水面も含めて計画に位置づけた方がよい。水域と陸域とを分けない方が自然環境の観点では重要である。海外の事例では、年に何回氾濫するかで空間区分を行っている例もある。
- ・例えばゾーニングでは、砂州が動く領域に対してゾーニングすることが考えられる。中間帯ゾーンをなるべく保全し、外にレクリエーションゾーンを作るというゾーニング案が考えられる。コアエリア、バッファエリアの考えを導入することも可能でないか。

### 3. 資料 - 5 「河川利用・生活環境に配慮した水量・水質の改善」

#### (1) 流況改善について

- ・流況の管理には、エコシステムマネジメントという観点が必要で、自然のふるまいの状態を維持することが重要である。

- ・日本のダムは余裕を持っているため、不特定容量の活用として、冬場は貯留せず、流すことも必要ではないか。
- ・流量と環境保全は一体となっていく必要がある。

#### 4. 資料 - 5 「地域・市民との連携・協働」

##### (1) 川に学ぶ社会について

- ・環境管理計画で論じた、中間帯ゾーンが失われることで遊び場が減ってきていると考えている。

#### 5. 河川環境行政の今後の方向について 報告書骨子素案

##### (1) 施策名称等について

- ・調査研究については、河川生態学会等、施策イメージを具体的に書いた方がよい。

##### (2) 土砂管理等について

- ・流況改善については書いてあるが、土砂管理についてはほとんど書かれていない。土砂の問題は対策がとれるかどうか。書き込むかどうか検討が必要である。
- ・近年は流木の問題が大きくなるのではないかと考えている。洪水時にも関係してくるが、流木災害は増えていくと思う。

以上